

〈自由投稿論文〉

キューバにおけるデジタル宗教の
実践と孤独化の諸相
— スマートメディアとインターネットによって
変容するサンテリア信仰を題材として — *

井上 大介

Aspects of Digital Religious Practices and Solitarization in Cuba:
The Transformation of the Santeria Religion
Through Smart Media and the Internet

INOUE Daisuke

キーワード： Yoruba系宗教、キューバ、インターネット、伝統的ババラオ、
現代的ババラオ、Yoruba文化協会、デジタル宗教

* 本論は、JSPS 科学研究費 20K01216（基盤研究 C / 代表：池田光穂）の助成を受け執筆したものである。また、本論は筆者が既に執筆した「キューバにおけるYoruba系宗教のアフリカ回帰主義的動向とその多様性」『ソシオロジカ』43(1・2) 2019: 1-27、「キューバにおけるレグラ・デ・オチャーイファ信仰の権威と正統性—グローバル化社会におけるヘゲモニーと民衆宗教」『ソシオロジカ』44(1・2) 2020: 1-23 に依拠しつつ、その中でインターネットによってデジタル化するYoruba系宗教の諸相について分析したものである。一部の資料はすでに過去の論文において紹介したものとなっており、本論ではその引用箇所を示している。

要約

本稿ではインターネットをはじめとする電子メディアを媒介としたコミュニケーション、相互行為が社会をどのように変容させつつあるのかという点について、宗教文化に限定して考察したものである。日本におけるデジタル・メディアと宗教に関する研究では、宗教教団がどのようにインターネットを活用しており、組織の形態や運営がどのように変化しつつあるのか、といった事例研究が中心となってきた。他方、欧米における研究動向では、**Digital Religion** という領域において様々な研究が、1990年代以降蓄積されてきた。本論の前半では、同研究領域の概要を先行研究に沿って紹介し、特にそこでの理論的枠組みが宗教観、儀礼、帰属意識、共同体、権威、身体化という6つの領域である点を整理した。後半では、その中の権威について注目しつつ、キューバにおけるヨルバ系宗教であるレグラ・デ・オチャ＝イファ信仰を題材に、そこにおける伝統的指導者と現代的指導者の相違点、およびそこでの師弟関係の変容および孤独化の現状に注目しつつ論を展開した。

はじめに：研究目的ならびに宗教の定義

科学の発展によるインターネット等の通信技術の発展や人工知能（以下AIと呼ぶ）の開発およびその普及は現代社会において大きな注目を集めている。そして社会の変化と関連したそれらの影響についても様々な分野で議論がなされつつある。さらにはAIが人知を凌駕するというシンギュラリティなる概念も一部で普及し、今後の社会を危惧した論考も種々展開されている。政府はデジタル庁を創設し、ソサエティ5.0というパラダイムに基づき、デジタル改革の推進に取り組んでいる。また高等教育ではデータサイエンスが共通科目として導入されつつある。さらには、自家用車の自動運転装置、労働や福祉等の環境におけるロボットの普及のみならず、コロナ禍におけるオンライン・コミュニケーションの普及により、**ZOOM**での間接的コミュニケーションが行政機関、企業、教育活動など幅広い分野において普及

し、さらには宗教文化においてもヴァーチャルな宗教儀礼や AI を駆使したデジタル観音の登場など、科学技術や AI と宗教の関係性についても関心が高まっている。

本稿ではこのような現状を念頭に、インターネットを媒介としたコミュニケーションや相互行為が現在の社会をどのように変容させつつあるのか、またそれとの関連で、そのようなメディアに接する人々の身体性がどう変化しつつあるのか、という点について、特に宗教文化に限定して考察を展開する。

より具体的には、キューバにおけるアフリカ系宗教の代表的存在であるレグラ・デ・オチャ=イファ信仰を題材に、同信仰習俗におけるインターネットの影響—インターネットによって変容する宗教文化に関し、権威に注目して考察する。

その際、アメリカの文化人類学者クリフォード・ギアーツによる宗教の定義「(1) 象徴の体系であり、(2) 人間の中に強力な、広くゆきわたった、永続する情調 (mood) と動機づけを打ち立てる、(3) それは、一般的な存在の秩序の概念を形成し、(4) そして、これらの概念を事実性 (factuality) の層をもっておい、(5) そのために情調と動機づけが独特な形で現実的であるようにみえる」(ギアーツ 1987:149-150) を参考にしつつ以下の通り定義したい。

すなわち宗教とは「(1) メタファーとメトニミーで構成される象徴の体系であり、(2) 人間の中に情調と動機付けを打ち立て、(3) 世界観・宗教観とよばれる一般的な秩序の概念を形成し、(4) それらの秩序を組織 (共同体) の身体を媒体とした儀礼によって権威化・事実化するとともに、(5) 組織によるヘゲモニー的实践を通じた日常化、常識化によって、(6) それらの秩序が現実的であるかのように信じさせるもの」である。

仮説としては、インターネットの普及により、以下の表で示した変化が生じつつあるのではないかという点を解明する。

より具体的には、(1)「象徴の体系」という項目では、メトニミーよりメタファー的なものに、(2)「情調・動機付け」の項目では、動機付けよりも情調的なものが顕著となり、(3)「秩序 (宗教観・世界観) の形成」の項目では二元論的なものから一元論的なものへのシフトが生じ、(4)「組織 (共

表1 インターネットが与える宗教への影響(仮説)

	以前	以後
(1) 象徴の体系	メトニミ的	メタファー的
(2) 情調・動機付け	動機付け	情調的
(3) 秩序(宗教観・世界観)の形成	二元論	一元論
(4) 組織(共同体)の儀礼による秩序の事実化	集散的・直接的・権威的(不平等)／身体的集団儀礼・宗教の内在化	分散的・間接的・非権威的(平等)／非身体的個人儀礼・宗教の外在化
(5) ヘゲモニー的实践による秩序の日常化・常識化	社会へのモデル	社会に関するモデル
(6) 秩序への信念	強い信念	弱い信念

出典 筆者作成

同体)の儀礼による秩序の事実化」という項目では、集散的・直接的・権威的(不平等)な環境が分散的・間接的・非権威的(平等)なもの、集团的・身体的なものから個人的・非身体的なものとなり、(5)「ヘゲモニー的实践による秩序の日常化・常識化」という項目では、社会に対するモデルから社会に関するモデルにシフトする、その結果、(6)秩序への信念が弱体化する、といった仮説を提示したい。さらに、スマートメディアやインターネットによる情報収集という近年の傾向により、師弟関係が従来の宗教実践と比べ希薄化しつつあり、これまでの親密な人間的紐帯に対し、より孤独な宗教実践が顕在化しているという仮説も同時に検証したい。なお、本稿では、以下で紹介する先行研究とも一部連動しているが、ギアーツの定義に加え、身体、信念、共同体、ヘゲモニー、権威といった言葉を追加し、その定義を発展させている。

特に身体については従来、それが宗教研究においては暗黙の前提であったため、人類学研究における身体への注目とは別に、改めて中心的な概念として宗教の定義などでは強調されることがなかった。しかしデジタル宗教に関する研究では身体化というテーマは中心的な概念となる可能性があるため、用語としてその項目を追記した。

1. 先行研究

1-1. インターネットと宗教に関する先行研究

(1) 日本での研究

インターネットと宗教というテーマは、日本においては、1990年から2000年にかけて、これまで土佐（1998）、生駒（1999）、井上（2000）などの書籍が刊行されてきた。しかしそれらの研究では、インターネットによって宗教組織がどのように変容するのか、といった問題提起のもと、組織の変容に限定した議論が展開されるにとどまっている。

他方、2000年代以降では、渡辺（2006）、川端ほか（2002）、関口ほか（2005）、塩月ほか（2003）、などの論考が存在する。しかしそこでも、インターネットやウェブサイトの利用により一部の宗教性が活性化しつつある点や、その利用状況がテーマの中心となっている。

(2) 欧米での研究

他方、欧米における研究動向では、“Digital Religion”（デジタル宗教）との名称により、1990年代以降、その研究が活発となっている。その中でも特筆すべきは、2012年に情報学を専門とする Heidi A.Campbell と Ruth Tsuria の編集をもとに出版された *Digital Religion : Understanding Religious Practice in Digital Media* という書籍である（Campbell / Tsuria 2012）。同書は2022年に第二版が刊行され、その影響が拡大しつつある。ここでは同書の内容を整理しつつ、世界におけるインターネットと宗教に関する先行研究の傾向をまとめておきたい。

同書は、まずインターネットと宗教に関する先行研究を整理したうえで、それらの研究がマス・メディア研究者によって開始され、その後、宗教研究者が同テーマに関与していったという事実を指摘している。

同書の目次は、デジタル宗教の先行研究に関して整理したイントロダクションに次いで、第一部「新しいメディアにおける宗教研究の諸テーマ」（「宗教観」「儀礼」「帰属意識」「共同体」「権威」「身体化」）、第二部「事例研究」では「宗教観」というテーマで韓国の仏教寺院文化プロジェクト、Twitter と宗教が、「儀礼」では Dragon, Cancer, Muslim Pro が、「帰属意識」では元エヴァンジェリック信者の Twitter におけるアイデンティティ、ニカブとユーチューブ、「共同体」ではオンラインにおけるハバド、クエーカー教徒のオンライン礼拝、「権威」ではハレディ（超正統派ユダヤ教徒）による反スマートフォン・キャンペーンの受動的攻撃性、カトリック司祭のフェイスブックにおける権威、「身体化」に関してはインドのビデオ・ゲームにおけるゲーム化された体感、デジタル的世界における死後、などがテーマとなっている。

第三部では今後の展望を整理し、新しい理論的枠組みとして宗教を「メディア」と捉える視点が強調されている。

また同書では電子宗教を「電子的に媒介されたメディア・プラクティスであり、認識された力の源泉と結びついた一連の関係性の中で協調することで、自らを差別化するもの」と定義し、その研究の方向性を明確にしており、今後の研究において非常に有益な情報を提供している。

（３）キューバでの研究／キューバの事例

キューバのアフリカ系宗教、サンテリアとその電子メディアとの関係について論じた書籍としては、Aisha M. Beliso-De Jesús 著の *Electric Santería: Racial and Sexual Assemblages of Transnational Religion*, (Columbia University Press, 2015)、René Rubí Cordoví 著の *Actualización de la Regla de Ocha-Ifá Religión y Poesía Afrocubana* (Doctoral Tesis, Texas A & M University, 2018)、Aurelio Alonso 編の *América Latina y el Caribe: Territorios Religiosos y Desafíos para el Diálogo* (Clacso, 2008) などがあるが、いずれもインターネットの普及、利用によってヨルバ系宗教がトランスナショナルな存在に変容しつつある、といった主張が中心となっている。

1-2. キューバにおける宗教事情

キューバでは、1992年の憲法改正により信教の自由・政教分離が確立した¹。より具体的には、1991年第三回人民権力全国会議第10期通常会期に憲法改正案が提起され、1992年第11回通常会期でキューバ共和国憲法が改正され、第1章の第8条に、信教の自由・政教分離・良心の自由が加えられた。また第6章の第42条では、宗教上および人間の尊厳を害する差別の禁止、第55条では改宗および無宗教の自由が加えられた。

これにより従来、社会的には差別の対象となり、非公式に実践されてきたアフリカ系宗教が社会空間の中で顕在化することとなる。政府はそれに対し、公式的な組織（ヨルバ文化協会）の形成をあっせんし、コントロールを図ってきた（井上2015、2019、2020）。

1-3. キューバにおけるインターネット事情

キューバにおける一般人向けモバイル端末でのインターネット接続の解禁は2018年12月6日である。以下の記述はフォーブスの記事内容である。²

キューバでは12月6日から、一般人のモバイル端末からのインターネット接続が解禁された。これは同国の史上初の出来事だが、費用をまかなえる国民は少ない。キューバ国営の通信キャリア ETECSA のプレジデント、Mayra Arevich がサービスの始動を宣言した。ETECSA の公式サイトによると、同社は3G通信をサポートし、通信帯域は900メガヘルツだという。キューバではこれまで、インターネット接続は厳しく制限されており、旅行者が泊まるホテル周辺でのみ利用可能だった。2013年にキューバ政府は複数のインターネットカフェの設置を開始しており、WiFiスポットからの接続は可能になっていた。しかし、モバイルからの接続はEメールへのアクセスのみに限定されていた。キューバ政府はここ2年間、3Gネットワークの整備を進めてきた。今年7月には、政府関係者やビジネス関係者らの間で利用可能になり、ジャーナ

リストが国営メディアのニュースを閲覧することも可能になった。そして8月には、全国の携帯端末ユーザーらに、9時間限定でインターネットを利用可能にするテストが行われた。当時、接続スピードは極めて遅く、多くのユーザーが電話をかけられなかった。また、テキストメッセージのやりとりも出来なかったという。ETECSAは12月6日から8日にかけて、段階的にサービスを拡大していくが「特定のエリアにおいては接続に問題が生じる可能性もある」と述べている。キューバ国民の平均的な月収は30ドル程度とされているが、今回のモバイル通信の料金は600メガの容量が約7ドルで、4ギガの場合は約30ドルとされている。また、このサービスでは一部のサイトがブロックされており、米国資本の反共産主義的网站は閲覧不可能となっている。

インターネットをめぐる社会的状況に関しては、公的には上記のような記述が目立つが、外国人の滞在を念頭においた観光ビジネスの拡大やそれに伴う自由主義経済の普及により、スマートメディアへのアクセスをはじめ、様々な場面における情報化が急速に進展していることも事実であり、筆者の友人の宗教関係者においては、様々な情報がインターネットによって共有されていることも事実である。

2. キューバにおけるデジタル宗教の諸相

ここからはキューバにおけるヨルバ系宗教を題材に、伝統的ババラオ（ババラオとはヨルバ系宗教における職能者の意）および、現代的ババラオという2つの方向性を題材に、調査内容を分析したい。

2-1. 伝統的ババラオ

まず伝統的ババラオから見ていきたい。

(1) 教団の概要

組織名はエグベ・トゥントゥン（名称の意は「聖なる新天地」）という。1997年にハバナ市に設立された組織である。代表は、フランク・カブレラ・スアレスという人物である。組織の目的は「ナイジェリア的伝統に依拠したイファ（ヨルバ系宗教における神の言葉に基づく占い）を実践すること」であり、信者数はキューバ国内外に300人（2018年当時）となっている。代表と3名の指導者が2013年にナイジェリアを訪問し、現地の宗教文化に関する諸要素を受容し、それらをキューバにおいて展開している。

(2) 指導者の概略：フランク・カブレラ

指導者のフランク・カブレラはキューバにおけるヨルバ系宗教の発展に先駆的な功績を残した存在として広く知られている。彼は1954年ハバナで生まれる。1961年（7歳）に入信儀礼をうけ、1962年（8歳）にババラオとなる。キューバの指導者ミゲル・ファブレス、ナイジェリアの指導者タイウォ・アビンボラに師事する。ナイジェリアやアメリカから取り寄せた文献や宗教アイテムを多数保管している。

ナイジェリアに現存するヨルバ宗教の教義の研鑽・実践に多くの時間や労力を費やしてきた。これまでのキャリアの中では、第10回世界ヨルバ宗教会議に代表で参加した経験もある。キューバ内外の実践者の中で最も重視される人物の一人である反面、現在でも非常に質素な暮らしを維持している人物である。

(3) 伝統的ババラオのコメント

以下、フランクのヨルバ系宗教や近年におけるその変容に関するコメントを紹介する。

「他の団体のことを非難したくないがババラオとして最も重要なことは研鑽

です」

「宗教儀礼のみならず、医学、健康、託宣などあらゆる正統な知識を得るべきです」

「35 年は修行が必要。現在、イファ宗教がキューバで熱を帯びています」

「しかし真剣に研鑽するという態度が薄れています」

「アフリカの伝統をアフリカの宗教専門家からもっと学ぶべきです」

「キューバの習俗は奴隷によって断片的に伝えられたものと自覚すべきです」

「キューバのイファはキューバのアフリカ宗教であるとの意識が重要です」

「アフロ・キューバ宗教という概念自体が的外れです」

「でなければ、我々はみなアフロ・キューバ人となるでしょう」

「政府の協力で設立されたヨルバ系宗教の唯一の宗教法人、ヨルバ文化協会
は一定の役割を担っています」

「制度の整備や政府との交渉などで、イファ宗教の発展に貢献しています」

「ただ彼らの役割はそこまでだ。よりこの宗教を深めるためには、彼らの存在
だけでは十分ではありません」

「やはりアフリカに知恵と力を借りなければならないでしょう」

「指導的人間は、中途半端な知識で権威を主張することなく、もっと研鑽し、
若者を育て、イファ宗教の発展に尽力すべきです」

「若者をもっと先達の業績を学ぶべきです」

「教育学を学んだ経緯から、現代のイファ信仰にとって最重要の課題は
キューバの初等教育の質的向上だと言えるでしょう」

「スマートフォン儀礼をおこなう若いババラオがいるが知識は弟子が師匠から
体得すべきです」

「私も見習いの時から常に師匠とともに過ごし学びましたが、今は少なくな
っているようです」

「読書の研鑽も重要だが表面的知識の受け売りでババラオと称する者は、こ
の宗教の本来の意味を理解していません」

「インターネットで海外から信者を募り、ビジネス的に人から多額の金を集
める人間は危惧すべきです。観光業や飲食業と共にキューバ社会の格差を

拡大しています」

「アフリカの伝統を重視しています。しかし一夫多妻制はキューバの法に反しており同意できません。イファは水のようなもので時代や社会によって形が変容します。ただ社会的規範に沿って解釈されていくべきなのです。信者間の分断もイファ思想からみれば間違っていると考えます」

（４）伝統的ババラオに関する考察

以下、筆者における伝統的ババラオに関する考察を展開する。まず、筆者はフランクを対象としたインタビュー調査において、彼のイファ宗教に関する膨大な書籍とそれらに関する知識量に驚嘆した。様々な概念、誦句、歴史的人物、託宣、薬草、伝統医療、儀礼などの情報が滔々と披露され、彼の学びの深さが理解できた。またその知的態度によって、彼がテキストやスマートフォンで儀礼を行う近年のババラオたちとは全く異質な存在であることが理解できた。彼は、自分の存在と周囲のババラオ達の研鑽の態度に大きなギャップを感じており、スマートフォン儀礼やそれを行うババラオに疑問を有していた。

また、アフリカの伝統を尊重し、真摯に学ぶ姿勢を強調しつつ、一夫一婦制などをはじめとするキューバの法的規範の遵守や他者との共存、社会貢献、教育的規範などを重視する発言には、宗教的リーダーであるとともに社会的、教育的、道徳的リーダーとしての自覚が看取できた。また先達の業績を無視し表面的な実践に終始する若い世代に危機感を感じており、師弟関係の復興などが彼の中の課題であることがうかがえた。

また彼の様々な知識や発言は、医者であり、哲学者であり、教育者であり、政治家であるといった重層的なパーソナリティとして理解することができ、そこに人々から信頼されうる威厳、カリスマ、権威、人間的魅力が看取できた。

2-2. 現代的ババラオ

では次に現代的ババラオについて見ていきたい。

(1) 指導者の概略

組織名はエグベ・イファ・オドゥ（名称の意は「オドゥの所有者たち」）である。2013年にハバナ市に設立された組織であり、代表はユネスキ・ゴンサレス・ラミレスという人物である。組織の目的は「キューバでオリチャ（ヨルバ系宗教における聖性）の伝統、イファの伝統を最もアフリカ的に維持」することである。彼の組織の特徴は、拠点内部に大きな庭を有している点であり、そこにはアフリカから輸入された植物や薬草などが栽培されている。また組織として、それらの植物をはじめ、章句や本尊などもナイジェリアの伝統に依拠したものを多数使用していた。

特筆すべきは、彼のパソコンにはヨルバ系宗教の儀礼や本尊、植物等に関する20000枚以上の写真や動画（歌、儀礼、楽器の演奏など）が保管されており、それが彼の正当性の拠り所であるかのように、その保有の重要性を強調していた。またホームページの作成・運営にも従事しており、そのような情報に触れ、メキシコなどからも信者が訪問するという。このような情報



〈写真1(左)、2(右)：スマートフォンを活用しての託宣（筆者撮影2018年）〉

化の傾向は50代までのババラオにおいて顕著な特徴であり、キューバで出会った多くの若いババラオには同じようなデータ収集や発信の傾向が見て取れた。

筆者が訪問した際は、少女への入信儀礼が行われていたが、ユネスキは信者（少女）に対し、父親が娘を諭すようなアドバイスを提示しつつ、儀礼ではスマートフォンによるインターネット情報に基づいた託宣が行われた。

入信儀礼「マノ・デ・オルーラ」では、ババラオによるイファ託宣が実施されることになる。より具体的には、ババラオが託宣において放り投げたヤシの実（インキーネス）の形状に基づき板上の砂に記号を記す。最後の形象をもとにイニシエーターの守護霊が決定することになるが、インターネットで出た記号の掛け合わせである卦は256通り存在する。ユネスキはそれらをすべて頭にインプットできておらず、その都度、スマートフォンで確認し、最終的な守護霊に関する判断を下していた。

ユネスキ自身も儀礼、教義に習熟できていない点を認めつつ、より正確に行うためにインターネット情報に依拠していると述べてくれ、悪気もなさそうである。



図1 グーグルプレイにおける託宣アプリ⁴

実はインターネット上には、様々なヨルバ系宗教儀礼のための託宣用アプリが普及しており、Tratado de Ifa（イファ概論）などはその代表的なものである。図1は、Google Playのアプリ「イファ概論」³である。アプリの説明には以下のような文章がスペイン語で記載されている。

「イファ概論についての PRO バージョン。バイナリー・ライティングとヨルバ・ライティングで256通りのイファのオドゥン（神）をインタラクティブに識別でき

る優れた完全版アプリ。また、誕生、諺、イファの言葉、パタキ（イファ哲学に関する歴史や寓話）の4つのセクションで区分されたそれぞれの形象に関する詳細な情報から学ぶことができます。祈り、アドバイスなどのほか、密教的事柄、各オドゥンに関する特徴ならびにそれぞれに関する完全な歴史が含まれています。」

このようなヨルバ系宗教の教義に関する内容は、長い間、師匠から弟子にのみ口頭によって伝承される秘事であった。それらが公のものとなっていく過程においては、20世紀初頭以降にキューバの民俗学者や人類学者によって著されたヨルバ系宗教に関する論文や書籍などのテキストが大きな役割を担っていた。信者たちはそうしたテキストによって自身の宗教実践の概要を文字としてより明確に理解していったのである。そのようなプロセスが、2000年代に入り、インターネットという電子媒体によってさらに大きな変化を迎えようとしているのである。以下は、そのような変化を含むヨルバ系宗教の現況に関するユネスキのコメントである。

(2) 指導者のコメント：ユネスキ・ゴンサレス

以下は現代的ババラオであるユネスキのコメントである。

「道徳的、倫理的規範を正しく提示し、信者を導くことが重要」

「ヨルバ文化に依拠するイファ信仰は最も重要」

「自分の知識、経験が不足しており、不安もありますが、私にとっては特定の師匠は存在していません」

「このような多様な情報化社会においては、一人の師匠からすべてを学ぶというだけでは十分ではないと思います。そこには限界があるのです。したがって、これまでのヨルバ系宗教における師弟関係も変化していくと思います。」

「儀礼におけるスマートフォンの使用については、キューバでインターネットが普及して以降、多くのババラオがそうしている。より正確な託宣のた

め不可欠だと思います」

「インターネットを介して、世界中から私のもとに信者が集まっています。これこそがイファの神が望むことだと思っています」

ここでの主張は自らが師匠としての知識の不足を認めつつも、伝統的な師弟関係によって知識を体得していくという従来のやり方よりも、情報化社会に適合することの方がより重要であるとの見解が示されている。

ただ師弟の人間関係については次のような懸念も示された。

「従来は師匠と弟子が、秘密裡に口頭伝承によってヨルバ系宗教の奥義を体得し、そのまた弟子に継承していたが、現在は、スマートメディアによるインターネット情報によってそのようなプロセスが完結するため、師匠と弟子の間の人間的紐帯は非常に希薄化し、その意味において孤独化した宗教実践が顕著となっているように感じています」

ここではスマートメディアによって宗教実践が特に師弟の関係性においては、孤独と連動している、といった主張が確認でき、本論の仮説の一部を証明する結果となっている。

その他、彼のコメントには次のようなものも含まれていた。

「儀礼や教義などはより現代的なものになっていくべきです」

「女性の最高位の聖職者イヤニファはキューバの伝統では否定されています。ヨルバ文化協会などはそれを認めていません。しかし私は尊重されるべきだと思います」

「ヨルバ文化協会のイヤニファを否定する見解には同意できません」

「ナイジェリアにおける女性の最高位の聖職者の存在をインターネットの検索で知ることになり、その後それに対し理解を深めました」

ここでは、女性をめぐるこのような地域に限定された宗教教義の根幹にかかわる伝統やその正当性が、従来の閉じた世界ではないグローバル化、情報化社会の動向において、相対化され、従来の宗教的権威が弱体化する可能性

を孕んでいることがうかがえる。実際、キューバにおける実践において、この女性の最高位聖職者の是非が重要なテーマとなり始めているのも、インターネット情報に頻繁にアクセスする信者による影響であるとともに、その他の教義や儀礼なども様々な点で変容のプロセスにあることを強調しておきたい。

(3) 現代的ババラオに関する考察

調査対象となったユネスキは人間的には非常に温厚で親切であった。しかし宗教的知識や儀礼的スキルに精通しておらず、折あるごとにスマートフォンによるインターネット情報の検索に依拠していた。そのためか、宗教的リーダーであるババラオとしての威厳や風格に欠けていた。本人もそれを認めており、そこが伝統的ババラオとの決定的な違いとなっている。そのことは彼の言動に自信がなく、前述の、医者であり、哲学者であり、教育者であるかのようなフランクとは大きな違いとなっていた。

しかしながら、現代の若者と同じように、インターネットへのアクセスなど電子文化には精通しており、海外のメンバーとも広範な交流を展開し、キューバにおけるヨルバ系宗教の存在を情報として普及する役割を十分に担っているといった特徴も確認できた。またスマートメディアによるインターネット情報の収集や普及という近年の変化によって、従来の宗教実践における師弟関係に対し、より孤立化、孤独化を伴う宗教文化を顕在化させつつある事実も一部ではあるが確認できた。

2-3. ヨルバ文化協会

(1) 概要

ここでは、拙論(井上 2015: 27-61)にそって、ヨルバ文化協会の概要を紹介する。同協会は、前会長であるアントニオ・カスタンニェダ氏とそのグループによって政府による法的認可のもと 1991 年にハバナ市に設立される。

協会の目的は、宗教や芸術をはじめとする Yoruba 文化の普及とされている。2014 年よりは現会長のホセ・ペレス氏のもと、Yoruba 系宗教の教義や儀礼的規範の統一を推進するとともに、アフリカ起源の神話に根差した舞踊などの普及活動、清掃活動などの社会貢献などに尽力している。ブレンサ・ラティエーナによると、同協会には 20,000 人（2015 年当時）のメンバーが登録しており、海外にも 26 の所属団体が存在し、現在のキューバで最も影響力のある Yoruba 系宗教の団体とされている。同協会のメンバーは年々増加の一途をたどっているが、その理由としては、協会への登録により発行される会員証が様々な恩恵をもたらすことが挙げられる。なお、同協会公式フェイスブックページ *Asociación Cultural Yoruba de Cuba* へのフォロワー数は 2023 年 2 月現在で 4.4 万人となっており、電子メディアにおける影響力の拡大も看取できよう⁵。

（2）信者への指導性

Yoruba 文化協会は、政府の認可を得た唯一の Yoruba 系宗教団体として、信者における社会規範の遵守と、宗教的統合を強く意識している。

以下では、教団の施設内に掲示されていた「信者に対する留意事項」の指摘事項を見ていきたい。

「ナイジェリアにおいてはすでに Yoruba 系宗教の存在はごく僅かであり、キューバにおいてその重要な要素が継承されている」
「Yoruba 文化協会こそがその正統性を体現する存在である」

これらの指摘事項は、アフリカやナイジェリアではなく、キューバにこそ Yoruba 系宗教の正当性が存在し、なかんずく政府に認可されている Yoruba 文化協会こそが、同宗教の権威であるという点が示唆されている。

また以下の指摘は、同協会が、Yoruba 系宗教実践における儀礼の変容に対し危惧を抱いている点を理解させてくれよう。

「現在における儀礼の変容を認めてはならない」

実際、現会長のペレス氏へのインタビュー（2015年に実施）では、「社会の近代化やグローバル化、インターネットの普及等によって、従来の師弟関係に大きな変化が訪れており、伝統的な儀礼も簡素化、省略可といった変化にさらされています」とのことであった。また以下のような「活動方針」でも、そのような懸念事項が示されている。

「儀礼の簡素化を認めてはならない」

「インターネットの影響は無責任な事象である」

「パソコンを用いての儀礼や託宣を行ってはいけない」

「パドリーノ（師匠）の選択には十分注意しなければならない」

このような指摘事項は、現在のキューバにおいて、インターネットがかなり普及しつつあり、ヨルバ系宗教においても、その影響が拡大しているとともに、そうした動向に対し組織が危惧を抱いていることが理解できよう。

ペレス氏は本件について以下のように語っていた。

「インターネットが普及し、様々な情報が誰でも簡単に入手できるようになり、誰でもがヨルバ系宗教のパドリーノになることができるようになりました。人によっては、ホームページを開設し、海外から信者候補者を募り、多額のお金を得ながら入信儀礼を実施し、信者数と財力を拡大しています。いい加減な信仰継承、いい加減な師弟関係が顕著になりつつあることに危惧を覚えています。」

また以下の指摘事項も注目に値する。

「イヤニファ（女性の最高聖職者）の存在は認めない」

イヤニファという概念は、アフリカの伝統において一部認められているレグラ・デ・オチャ＝イファ信仰における最高位の聖職者ババラオの女性版の名称である。しかしキューバの Yoruba 系宗教の伝統では女性が最高位の聖職者とはなれないことが厳格に共有されてきた。しかしインターネット情報などによって、こうしたキューバに限定された伝統が相対化される傾向にあり、アフリカにそのアイデンティティを求める「アフリカ帰帰主義的」信仰実践者においては、こうしたイヤニファの存在を積極的に認めようとする動きも顕著となっている。なおイヤニファをめぐる動向については拙論で指摘している（井上 2019: 1-28）。

（3）Yoruba 文化協会に関する考察

Yoruba 文化協会に関する分析では、同協会がネット社会での儀礼の変容、職能者の質低下に大きな危惧を抱いている点が看取できた。施設の掲示物は 2018 年時点で撤去されていたが、それ以前の掲示物がそのような傾向を示唆していた。現在はそれらの掲示事項が撤去されている点から、協会が信者に対する協会の姿勢が柔軟なものにシフトしていることがうかがえる。しかしキューバの伝統的宗教性が、Yoruba 文化協会におけるアイデンティティの核であることから、スマートメディアやインターネット、そして近代化によって変容する儀礼や教義（女性の最高聖職者イヤニファの存在を含む）の変容には非常に否定的な態度を堅持していることが理解できた。

おわりに：解明できた点および今後の課題

本稿では、キューバにおけるアフリカ系宗教の代表的存在であるレグラ・デ・オチャ＝イファ信仰を題材に、同信仰習俗におけるインターネットの影響—インターネットによって変容する宗教文化に関し、権威に注目して考察した。

依拠したフィールドワークの結果と本論での整理に基づくならば、以下のような結論が提示できるであろう。まず、伝統的ババラオに関しては、師匠

と弟子の関係が強固である、師匠の権威が強い、幼少期からの長期にわたる宗教実践が前提であり、師匠への師事や師匠をめぐるコミュニティにおける正統的周辺参加⁶やそこでの口頭伝承をはじめとする儀礼や教義の体得、さらにはそれらを補足するための長期間の書籍による研鑽や思索などによって、教育者、哲学者、医者のような素養をもった宗教指導者として社会に影響を与えてきた、などの点が看取できる。

現代のババラオに関しては、師匠と弟子の関係が弱い、師匠の権威が弱い、インターネットによる情報収集、口頭伝承ではなく動画などを利用、幼少期の入信ではなく、短い時間で宗教的指導者となる場合が多い、ビジネスライクの様相が強まっている。またスマートメディアやインターネットによる宗教教義に関する情報入手やその拡散によって、従来の師弟における親密な人間関係が希薄化し、宗教実践における孤立化、孤独化が進展していることも理解できた。

他方、ヨルバ文化協会は、インターネットを否定、イヤニファを否定、儀礼の変容や簡素化を否定しつつ、キューバ的伝統の正当性を主張する方向にある。

従来、キューバではヨルバ系宗教は書かれた聖典がなかったので、信者の間では、師匠と弟子の直接的な交流により宗教が継承されていた（井上 2015: 27-61）。

既に述べたように、20 世紀初頭、キューバの人類学者・民俗学者がヨルバ系宗教を研究し、それが書籍として出版され、それらの文字情報によって教義などが信者およびそれ以外の人間に広く共有されていった。そのような宗教伝統が、21 世紀においては、インターネット情報がキューバの信者のみならず世界中の人間に共有されつつあり、特に動画による儀礼の開示はこれまでの権威的秘事を脱神秘化しつつある。従来、厳格な師弟関係のもと、キューバやナイジェリアなどの特定の地域における身体性を伴った修行や経験によってのみ体得できた知識が、現在ではヴァーチャルな事実として受け売りされるに至っているのである。

以上のように、キューバにおけるヨルバ系宗教レグラ・デ・オチャ＝イファ信仰においてはインターネットの情報はその宗教的権威を著しく低下し

つつあり、大きな変容のプロセスになることが確認できた。

なお今後の課題であるが、本研究では、**Digital Religion** のうち、特に宗教の権威について論を展開したが、その他の項目、宗教観、儀礼、帰属意識、共同体、身体化については十分に考察が展開できなかったため今後の課題とする。また権威についても、デジタル化する宗教において、何らかの事例が既存の伝統的権威の向上につながるのか、という点についても精査していきたい。

〈参考文献・日本語〉

- 生駒孝彰, 1999, 『インターネットの中の神々—21世紀の宗教空間』平凡社。
- 井上順孝, 2000, 『インターネット時代の宗教』新書館。
- 井上大介「キューバにおけるサンテリア信仰をめぐる人類学的実践」『ソシオロジカ』39巻(1・2) 2015: 27-61。
- 井上大介「キューバにおけるヨルバ系宗教のアフリカ回帰主義的動向とその多様性」『ソシオロジカ』43(1・2) 2019: 1-27。
- 井上大介「キューバにおけるレグラ・デ・オチャーイファ信仰の権威と正統性—グローバル化社会におけるヘゲモニーと民衆宗教」『ソシオロジカ』44(1・2) 2020: 1-23。
- ギアーツ, クリフォード, 1987, 『文化の解釈学1』吉田禎吾ほか訳, 岩波書店。
- 川端亮ほか, 2002, 「IT化された宗教実践—ある金光教教師の挑戦」『新世紀の宗教—『聖なるもの』の現代的諸相』宗教社会学の会編, 創元社。
- 塩月亮子, 佐藤壮広, 2003「インターネットにみる今日のシャーマニズム—霊性のネットワーク」『日本橋学館大学紀要』第2号: 79-88。
- 関口和真ほか, 2005「スピリチュアルなコミュニケーションを支援するウェブコミュニティとウェブログのシステム構築」『情報文化学会誌』12(1), 情報文化学会編集委員会編: 46-55。
- 土佐昌樹, 1998, 『インターネットと宗教—カルト・原理主義・サイバー宗教の現在』岩波書店。
- レイヴ, ジーン／ウェンガー, エティエンヌ, 1993, 『状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加』佐伯胖訳, 産業図書。
- 渡辺光一, 2006, 「宗教とインターネットに関する実証的研究とその実践的含意」『宗教と社会』12: 3-35。

〈参考文献・欧文〉

- Campbell, Heidi A. / Tsuria, Ruth (ed.), 2012, *Digital Religion : Understanding Religious Practice in Digital Media*, Routledge.

〈注〉

- 1 吉田稔「資料キューバ共和国憲法―解説と全訳―」『比較法学』47 卷 1 号 234 頁。Editora Politica, La Habana, 1992 (<https://www.waseda.jp/folaw/icl/assets/uploads/2014/05/A04408055-00-0470102311.pdf>)
- 2 Forbs JAPAN <https://forbesjapan.com/articles/detail/24287> (2021 年 10 月 6 日閲覧) 政治経済 LOGO 2018/12/07 06:00「キューバで史上初、携帯からのインターネット接続が解禁」
- 3 https://play.google.com/store/apps/details?id=eha.activity_ti_pro&hl=es_BO&pli=1 (2022 年 12 月 26 日 16 時閲覧)
- 4 https://play.google.com/store/apps/details?id=eha.activity_ti_pro&hl=es&gl=US (2023 年 2 月 9 日閲覧)
- 5 <https://www.facebook.com/@asyorubacuba/> (2023 年 2 月 9 日閲覧)
- 6 集団の正当な構成メンバーとしての権利を得つつ、その初期の段階においては周辺の作業に従事しつつ、熟練の構成メンバーの作業を見様見真似で体得していく学習過程。詳しくはレイヴ&ウェンガー (1993) を参照のこと。